

マツヒメハマキ (別名 マツノクロマダラヒメハマキ, アカマツハマキ)

夏から秋にマツの葉を糸で束ね合わせて食べるイモムシ (幼虫)。最大長約12mm。体は黄白色。頭部は淡い茶色、そのすぐ後の背面は淡い黄土色。

まれに多発することがある。

【学名】 *Epinotia rubiginosana koraiensis*

【分類】 チョウ目 (Lepidoptera) , ハマキガ科 (Tortricidae)

【分布】 北海道, 本州, 四国; 千島, ウスリー, 中国東北部。

【生態】

宿主: マツ属 (アカマツ, ハイマツなど)。

年1世代。成虫は6月中旬~7月中旬に現れる。幼虫は夏から秋に出現。小さなときは葉に潜る。成長すると数枚の葉を束ね合わせて巣を作り、巣の内側の部分を食べる。巣の先端は通常切り落とされる。幼虫は10月に地上に降りて、落葉中で越冬し、翌年の5月に蛹になる。

【被害と防除】

低地のハイマツ群落 (川湯) や庭木などで多発が観察されているが、ごくまれである。防除は普通必要とされない。

【文献】

1984. 鈴木重孝, 駒井古実. 北海道における針葉樹を摂食する小蛾類. 北海道林業試験場報告, 22: 85-129. (分類, 形態, 生態)

北海道立林業試験場・緑化樹センター

マツヒメハマキ hamaki/matuhime/
kaisetu.htm

「文章」原秀穂, 北海道立林業試験場, 2001/12/23.